

「居心地」の思考

第四回

思いのそぎの孤独

住まいにける思いが三つのものでできている。

「場所」への思い、そして自分が参加するんだという「手作り」への「思い」（能動性）、そして残った「この領分」を全部容れる容器、「居心地」。

この三つの「思い」の部分が、ちょうど色の三原色のように取り出され、ひとそれぞれの個性的な「思い」はその三原色を混ぜてつくられるいろどりになる。

だから、取り上げたそれぞれの文章表現には、「場所」へのこだわりがあ

り、自分がやるんだという能動性のある、独特の「居心地」があらわれていた。

それぞれのひとの複雑な「思い」を、まるで色分解するかのようにときほぐすのは、快よい楽しさがあった。

「居心地」は場所や能動性とは密接な関係がありながらも、特別な集合体でもやもやしている、多くを包み込む便利なことばのようにみえた。

それでひとつこと、終わりになるはずであった。



え・安原喜秀

住む。

見えているものだけではない。見えないもの、物語、虚構、西洋と東洋の間を想像力によって、古今にも開かれた宇宙をとびまわり、思索する。

「家とは、避難し、安心を求めにくる場所と考えられているかもしれない。私は、家とは、そういったこと以外のことにもさらされている閉域だと思ふ。

安全だの、安心だの、家庭だの、

ところが、フランス人女性作家、マルグリット・デュラスの言葉群にふたたびゆきついて、たじろいでしまう。

フランス領植民地インドシナ（現ヴェトナム南部）で生まれ育ち、大学のためにパリにわたり、のちに小説、脚本、映画にといくつもの作品を出し続けた、それらの作品と、体験にみちた人生の軌跡が説得力をもっていた。

（かつて、なんとなく作品に惹かれ、翻訳本が沢山でいたので古書店巡りをしては求めていた。持っているだけで安心した気持ちがあったのを思い出す。）

彼女は、早くから家族内の愛憎に苦しみ、孤独を知らされていて、自分を身代わりにした主人公を押し出しては、ひとり居る女を、表わしてきた。

女の性を描く、だから男女間の、女と女の、愛、性的な交感、をみつめ、自分がかかわったものから逆に支配されたり邪魔者にあつかわれたりするの

を、特に夫婦のそれを何度も取り上げ、そこから孤独、閉塞、そして密室恐怖、こころの奥をそっとさします。

人間の孤独をみつめ引き受ける。

そのひとが家について語る。

家や場所が彼女に映画を撮らせる力だという。

暗示的な言葉を連発する登場人物たち。ほとんど物であるように動かされる人間。なものでもないような人間。外界と遮断された家のなかでなにかがおこる。

彼女の意見はインタビューで明かされる。

このとき（一九七六年）デュラスが住んでいるのは、実験的一人暮らしともいえる家。

そこは日常に埋没しないきつかけをつくってくれる。厚い壁の十八世紀に立てられた田舎家を手に入れ、息子や前夫がおとずれはするものの、一人で

団欒の温もりだのといったありとあらゆるありきたりなこと以外のことが起こる。

ひとつの家の中には、組み入れられている家族に対する嫌悪感、逃げ出したいという欲求、自殺したくなるようなあらゆる気分がある。」

（『マルグリット・デュラスの世界』青土社）

とデュラスはいう。そして、「家の中に漂う冷めた空気が、眼を向けたくない心配事を一瞬でも忘れさせてくれるのが、視覚的に演出された、（絵に描いた幸せ）だ」ともいう。

（絵に描いた幸せ）が家のまわりをまわっていても、それはどうしてもなくてはならないものなのだ。

住まいにける思いは、こうして皮むくと、孤独の扉を開き、「居心地」はその奥深さをのぞかせる。